

死の快走船

大阪圭吉

太い引きずるような波鳴りの聞えるうらさびた田舎道を、
 小一時間も馬を進ませつづけていた私達の前方には、とう
 とう岬の、キャプテン^{ふかや}深谷邸が見えはじめた。

藍碧の海をへだてて長く突出した緑色の岬の端には、眼
 の醒めるような一群の白聖館が、折からの日差しに明々と
 映えあがる。向って左の方に、ひときわ高くあたかも船橋の
 ような屋上露台^{テラス}を構えたのが主館^{おもや}であろう。進むにつれて
 同じように白い小さな船室風^{ケビン}の小屋が見えはじめ、小屋の
 傍らにはこれも又白く塗られた細長い柱^{マスト}が、海近く青い空
 の中へくっきりと聳えだした。邸^{やしき}の周囲には一本の樹木も
 なく、ただ美しい緑色の雑草が、肌目のよい天鵞絨^{きめ びろうど}のよう
 にむっちり^{おもちゃ}と敷き詰って、それが又玩具のような白い家々
 に快い夢のような調和を投げかける。が私達が岬へ近づく
 に従って、それは雑草ではなく極めてよく手入れの行き届
 いた見事な芝生であることが判って来た。

深谷邸の主人と云うのは、なんでも十年ほど前まで某商
 船会社で、^{キャプテン}歐洲航路の優秀船の船長を勤めていたと云い、
 相当な蓄財^{たくわえ}もあるらしく退職後はこうして人里はなれた美

しい海岸に邸を構えて、どちらかと云えば隠遁的な静かな生活をしていた謂わば隠居船長なのであるが、永い間の海の暮しが身について忘れかねたのか、まるで大海の中のような或は絶海の孤島のような荒れ果てたこの地方の、それも海の中へ突出した船形の岬の上へ、しかもまるでそれが船の上の建物でもあるかのような家を建てて日ねもす波の音を聞き暮すと云う。不幸にして、私はまだ一度もこの隠居船長に面識を持たないのであるが、そしていま又こうして夫人の重大な招きの電話を受けて始めて深谷邸を訪れる機会を持ちながらもいまはもう会おうにも会えない事情に立ち至ったのであるが、かつて私のところへ二、三度薬を取りに来たこの家の召使の言葉に依れば、なんでも深谷氏のこの奇妙な海への憧れは己れの住^{すま}う家の構えや地形のみではあきたらず、日常生活の服装から食事にまでも海の暮しをとりいれて、はては夫人召使から時折この家を訪なう外来の客にいたるまで己れを呼ぶにキャプテンの敬称を強要すると云う、それはまるで海の生活を殆んどそのまま地獄の果までも引っ提げて行こうほどの激しいひたむきな執念だった。されば既に還暦を越した老紳士で人柄としては無口な穏かな人でありながら、家庭と云うものにかけて

はまことに冷淡で、わけてもひとつの妙な癖を持っていて
しばしば家人を困らしていたとのこと。それはひとくちに
云えば並はずれたヨット狂で、それも朝から晩まで附近の
海を我がもの顔に駆け廻ると云う程度のものではなく、夜
になって辺りが闇にとざされる頃から青白い海霧が寒む寒
むと立てこむ夜中にかけて墨のような闇の海を何処をなに
しにほっつき廻るのか家人が気を揉んで注意をしても一向
に聞きいれないとのこと。もっとも私のところへ取りに
寄来した薬と云うのが凡て主人の使うもので、それが皆一
種の解熱剤であるのを見ても、大分無理な夜更しでもする
らしいのは判っていたのだが、それならば私がその折召使
に伝言した忠告も、恐らく家人の注意と同じように聞き捨
てられたに違いない。可哀想に、年老いた頑なキャプテン
深谷氏は、そうして我れと我が命を落すような怪我をしで
かしたのではあるまいか。老人がそのような夜更しをする
さえ既に危険であるのに、殊にこの辺りの海は夜霧が多く
話に聞けば兇悪な大鱻さえも出沒すると云う。私は、夫人
の慌だしい招きの電話を思い出しながら、きつとこの予感
は外れていないように思われるのだった。ともあれ私達は
急がねばならない。

やがて私達は石ころの多い代赭^{たいしゃ}色の、美しい岬の坂道にかかった。ちょうど日曜日で久々に訪ねてくれた水産試験所^{あずまやさぶろう}の東屋三郎氏は、折角計画した遠乗りのコースをこのような海岸に変更されて最初のうち少からず鬱^{ふさ}いでいたのだが、けれども途々キャプテン深谷氏に関する私の貧弱な説明を聞き、いま又こうして奇妙な岬の深谷邸を眺めるに及んで、はやくも心中にいつもの好奇の病が首を起したのか、いまはもう私の先に立って進みはじめた。

私達の乗った馬は、倶楽部中で一番優れたものだったし、岬の坂道は思ったよりも緩やかだったので、それから十分としないうちに私達は深谷邸の玄関^{ポーチ}に辿りついた。折から待ち構えていた下男の手によって、間もなく私達の馬は建物の日蔭の涼しいところへ繋がれ、やがて私達は明るい船室^{ケビン}風の応接室で、キャプテン深谷氏の夫人に面会することが出来た。

地味な黒い平服を着て銀のブローチを胸に垂れた深谷夫人は、まだ四十を幾つも越さぬらしい若々しさだ。大粒な黒眼に激しい潤^{うるお}いを湛えて、沈鬱な口調で主人の上^{うへ}にふりかかった恐ろしい災禍について語るのだった。

私は夫人の話すところを聞くうちに、先程私の抱いた予

感が見事に適中しているのに驚いた。夫人の語るところによれば、キャプテン深谷氏は昨夜もあの奇妙な帆走セイリングに出掛けたと云う。そして今朝はもう冷たい骸むくろとなって附近の海に愛用のヨットと共に漂っていたのだ。私は医師としての職責を果すために、直ただちに夫人を促して、別室に置かれた深谷氏の屍体の検査をしなければならなかった。けれどもそこで私は、この事件をかくも異様な恐るべき物語にってしまったところの驚くべき最初の事実を発見しなければならなかった。

キャプテン深谷氏の屍体は、片足をふか鱻にもぎとられた見るも無残な痛ましいものであったが、検死を進めるに従って、はからずも頭蓋の一部にビール瓶様の兇器で殴りつけられた、明かに他殺の証跡が残されているのを発見した。

私は驚きにふる顫えながらも、つとめて平常を装うようにして、静かに夫人に訊ねた。

「御主人の屍体は、ヨットの中になりましたか？」

すると夫人は私の顔色を見取ってか、急に不審気なおどおどした調子で答えた。

「いいえ、船尾の浮袋スターンへ、差通されたように引っかかって、ロープで船に引かれるように水びたしになっておりました」

「ヨットは最初誰が見つけましたか？」

私は再び訊ねた。

「下男はやかわの早川でございます。あれは、白鯨号しらすめごうを見つけますと、すぐに泳いで、連れて来てくれました。でも先生、なぜでございます」

「奥さん、これは、大変重大な事件でございます。——御主人は、昨晚何時頃にお出掛けになりましたか？」

「さあ……」と夫人は蒼褪あおざめて小首を傾かしげながら不安気な様子で、「いつの間に出掛けましたか……なんでも今朝の七時に主人の寝室に参りました時、始めてそれと気づいたほどでございますので……それに、主人が夜中に帆走セイリングをいたすことなぞ、それほど珍らしくもございませんので……」

この時東屋氏が、忪こらえかねたように傍らから口を入れた。「失礼ですが、御主人は、なぜ夜中になぞ帆走セイリングをなさるのですか？」

すると夫人は困ったように、

「……あれが、あの人の、道楽なのでございます」

そう云って淋しそうに、笑うとも泣くとも判らぬ表情かおをした。

「いつも御主人は、お独りセイリングで帆走されるんですか？」

私が訊ねた。

「はい……でも、時々家人を誘いますので、そのような時には、下男に供をさせることにいたしておりました。でも——」

「昨晚は？」

「昨晚は一人でございましたが——」

恰度この時、二人の紳士が室内へは行って来た。私達は満たされぬ思いでひとまず口を噤んだ。深谷夫人は立上って、二人の紳士を私達へ紹介した。

「こちらが、主人の友人で黒塚様と被仰います。こちらが、私の実弟で洋吉と申します。どうぞ宜しく」

キャプテン深谷氏の友人黒塚と云うのは、見たところまだ四十を五つと越していない、かっぷくのいい隆としたアメリカ型の紳士で、夫人の実弟洋吉と云う方は、黒塚氏に較べて体も小さく年も若く色の白い快活そうな青年だ。二人共同じような純白の三つ揃いを着て、どことなく洒脱な風貌の持主だった。

形ばかりの簡単な挨拶を済ますと、私は早速夫人へ、前の続きを切り出した。

「失礼ですが、只今こちらの御家族は？」

「家族、と申してはなんですが、只いまのところ、この方達も加えまして、女中のおきみと下男の早川と、妾^{わたし}達夫婦の六人でございます」

私は二人の紳士へ訊ねた。

「失礼ですが、御二人とも永らく御滞在ですか？」

「ええ、いや」と洋吉氏が引きとって答えた。

「僕はずっと前からいますが、黒塚さんは、昨夜着かれたばかりです」

「昨夜、ああ左様ですか」と今度は夫人へ、「ではもう一度お訊ねしますが、昨晚御主人は、お独りで帆走^{セイリング}に出られたんですな？」

「ええそれはもう」

夫人はそう云って、もどかしそうに私を見た。そこで私は思い切って乗り出すと、

「では申し上げますが、実は皆さん……どうもこれは、私の力だけではお役に立たないことになりました。御主人の死は、御自身の過失によるものではありません。一応警察のほうへ、御電話して戴かねばなりません」

すると今まで私の執拗な質問に、先程から何故か妙に落着のない不安気な様子を見せていた深谷夫人は、どうした

ことか急に眼の前の空間を凝視^{みつ}めたまま、声も出さずに小さく顫えだした。

二人の紳士は、さても面倒なことになったと云う様子で、暫く手を揉み合わせていたが、やがて荒々しく室を出ていった。

居残った私達三人の間には、妙に気不味^{きま}い沈黙^ずがやって来た。が、まもなく夫人は、なにか意を決したように顔をあげると、訴えるような様子で私達へ云った。

「……こんなことにでもならなければ、と思っていたのですが……実は、あの……昨晚から、主人の様子が、いつもと変っていたのでございます」

「と被仰^{おっしゃ}ると？」

私は思わず訊き返した。

「はい、それが、あの……あれはなんでも、ラジオの演芸が始まる頃でしたから、宵の七時半か八時頃と思いますが、その頃から、なにかあったのか急に主人は落着きを失いまして、ひどくそわそわしはじめたのでございます……」

夫人が一寸言葉を切ると、東屋氏が口を入れた。

「失礼ですが、その頃に御来客はなかったですか？」

「ございませんでしたが」

夫人が眉を^{ひそ}顰めた。すると東屋氏は、^{ドア}扉の方を顎で指しながら、

「只今の黒塚さんと^{おっしや}被仰る方は？」

「あの方のお出^{いで}になったのは、九時頃でございます」

「ああ^{そう}左様ですか。ではその前、つまり御主人がそのようになられる前に、御主人と話をされたような御来客はなかったですか？」

「ええ、お客様はおろか、^{きのう}昨日は郵便物もございませんでした。もともと、いつだって、^{ここ}此处を訪ねて下さる方は、滅多にございませんが——」

夫人はそう云って先程のあの淋しげな顔色をチラッと見せた。が、すぐに次を続けた。

「……でも確かに、なにかひどく心配なことが起きたに違いございません。それは心配、なぞと云いますよりも、いっそ恐怖とでも申しましようか……こう、ひどく困った風であちらの^{はなれ}別館の方の^{ケビン}船室の書斎へ籠りまして、暫く悶えてでもいたようでしたが、恰度心配してこっそり様子を見に参りました私は、そこで主人の、物に怯えるような^{ひとりごと}独言を聞いたのでございます」

「どんなことですか？」

私は思わず^せ急き込んだ。

「はい、あの、恰度私の聞きましたのは、なんでも主人が、
こう卓を叩いて、うわずった声で、『明日の^{あす}午后^{ひる}だ、明日の
午后^{ひる}までだ』と、それから低い声で、怯えるように、『きつ
とここまでやって来る』とそれだけでございますが……そ
れから急に主人は、さもじっとしてられないように立上
って室^{へや}を出て来たのでございますが、恰度そこに立ってい
ました私を見つけますと、一層不機嫌になりまして、いま
までついぞ口にしたこともないような卑しい口調で、お前
達の知ったことではないと云うように叱りつけるのでござ
います……でも先生。まさかこのようなことになろうなぞ
とは、存じもよりませんでしたので、それに……こんなこ
とを申上げるのもお恥かしい次第でございますが、あのひ
とは、平常^{ふだん}から邪険な、変った人でございますので、逆ら
わないに限ると思ひまして、心ならずもそのまま自室^{へや}へ下
って、先に寝^{やす}んだのでございます……それが、もう今朝は、
こんなことになりまして……」

夫人はここで始めて眼頭に光るものを見せると、堪え兼
ねたように面^{かお}を伏せてしまった。

私達は、顔を見合せて、席を外すことにした。

廊下に出ると、私は東屋氏に寄りそうようにして云った。

「……驚いたねえ……大変なことになったものだ」

すると東屋氏は、考え深そうに、小声で云った。

「深谷氏の怖れていた奴が、明日の午後、つまり今日、でなくて昨夜やって来たわけだな」とそれから急に改まって、

「君、警察の連中が此処へ着くまでには、まだまだ時間があるよ。遠い凸凹道でこぼこだから、三時間は充分かかる。ね、ヨットを見せて貰おう。昨夜深谷氏が乗ったと云うその問題のヨットだ。……僕はなんだか、ひどくこの事件に興味を覚えるよ」

そう云って彼は、私の肩に手をかけた。

本来私は、余り好事家ものずきのほうではないつもりだが、東屋氏にこう誘われると、どうしたものか理性より先に口のほうで「うん、よし」と返事をしてしまった。

そこで私達は来合せた洋吉氏に断って玄関ポーチへ出ると、下男に案内を頼み、岬の崖道を下って岩の多い波打際に降り立った。